

安全と標準・認証研究会準備会メモ

第3回準備会メモ(2002. 12. 17.)

日時: 2002年12月17日(火)9:30~12:30

場所: 日本機械学会会議室

出席者: 杉本(北九州市立大学)、坂(三菱総研)、中田(Open System Inc.)、柘平(TUV Rheinland Japan)、徳永(クボタ)、加部(NPO 安全工学研究所)、野口(Bureau Veritas、記)

議題: 認証研究会についての今期と来期への活動を議論

1. 正式名称を、安全に関わる標準化と第三者認証について研究する「安全と標準・認証研究会」とし、略称を「認証研究会」とする。

2. 研究会のコンセプトを今までの議論をベースに箇条書きで10行程度にまとめて示すこととする。

以下のような議論があった。

(1) 安全については適用可能な最新の(state-of-the-arts)技術水準の標準化が必要であり、その運用に当たっては第三者による認証が不可欠である。このことは設計者への無限責任を回避し社会の仕組みの中で責任を分かち合い明確にしようということの意味するものである。

(2) とは言いながら、日本の現状は事業者の責任が大きく、法人の中の設計者にとっては楽な面もある。機械学会で安全を議論することは、学生も含めて設計者の立場で、考える意味が大きい。シンポジウム、小冊子を通じて解説、啓蒙活動を行っていく。

(3) 2003年3月に、ISO12100が完全にJIS化されるので既存のJIS体系の見直しが必要となり、JISは安全の国際規格との整合がとられることになる。

(4) 行政も色々に対応を行おうとしているが、役人の性癖でどうしても旧来の考えから抜け出せない場合も多く、縦割りでは上手く行かない面が多い。バイオやITは横断的なものである。安全に関しても、役所に頼るという明治の文明開化時代のアプローチから抜け出し、設計者が意識改革を行い変わらなければならない。国際的に通用する安全規格、認証システムを作り、運用を行わなければ国際競争力を無くし、企業をつぶす事になる。韓国で日本の新幹線が負け、フランスのTGVが採用されたのは危険度分析が出来ていたことが大きな理由である。

(5) 既に、中国ではCCCマークを制定した。現状の問題点、特に海外に比較した場合の位置、動きについて把握し、国際的に通用する仕組みを考えていく。

(6) リスクの許容レベルは、各国の経済レベル、文化によって必ずしも同じではないが、製造者責任、消費者保護の観点から議論を行っていく。

(7) 新しい機械、安全規格の無い機械、例えば玩具ロボットのアイボは、第三者機関の専門家が

相当なチェックを行い認証を出す事で認可がおり、保険会社も応じて保険がかけられたが、規格作りは新製品の後追いになる宿命であり、その様な場合の対応、仕組みについても議論していく。

(8) 説明責任と日本語で訳されている Accountability は別の言葉では Product Stewardship、Responsible Care、Informed Consent と類似の概念であり、専門技術者の責任として理解し対応を行わなければならないものである。

(9) 設備は、劣化が進行するわけで、維持規格について考え方を整理する必要がある。

(10) 設計情報開示と知的所有権の問題があるが、安全に関わる部分だけであり、欧米の機器は、最初から第三者による検査があるという前提で作られ、必要なところだけ開示するようになっている。

(11) あるデータによると日本全体で検査認証に関わっている人口は70万人と言われているが、実際には欧米に比べ第三者機関は確実に少なくシステムとして改善すべき点は多い。

3. 立上げのシンポジウムを5月12日(月)午後、杉本先生、ロボメカの藤江先生、ドイツから来日の長岡技術科学大学客員教授ノイドルファー氏、TUV Rheinland 副社長のハインツ氏をパネラーに行うことで、運営委員会に諮る。

4. 次回、2003年1月20日(月)9:30~12:30、運営委員会(14:30)の前に機械学会で開催。最初に LOPA(Layer of Production Analysis)について坂氏が話題提供する。

以上